



野呂望

神奈川県厚木市出身。県立厚木西高等学校卒業、昭和音楽大学作曲学科作曲コース卒業。同大学院音楽研究科修士課程音楽芸術表現専攻(作曲)修了。作曲を和田和久、都倉俊一、後藤洋、李建鏞(イ・ゴニョン)の各氏に師事。SHOWAフレッシュアーティスト・コンサート2016に出演。テアトロ・ジーリオ・ショウワ・オーケストラ第13回、昭和ウインド・シンフォニー第18回定期演奏会に出演。日本トロンボーン協会主催トロンボーンピース・オブ・ザ・イヤー2017作曲賞入賞。21世紀の吹奏楽“響宴”第21、23回、25回入選。大江戸シンフォニックウインドオーケストラ所属。

野呂望先生

ロングインタビュー

第90回定期演奏会記念委嘱作品『祝福のアコレード』を作曲いただいた野呂望先生に、委嘱作品の練習リーダーを担当した団員がお話を伺いました。

野呂先生のご経歴を辿り作曲家としての野呂先生のルーツを紐解くとともに、『祝福のアコレード』作曲の背景や裏側など委嘱作品の魅力に迫ります。

なお第90回定期演奏会は2024年1月14日(日)の開催を予定しております。ご来場の際予約サイト「teket」よりチケットの事前お申し込みが必要となりますので、公式HPや各種SNSをご参照の上、お申込みいただきますようお願いいたします。

作曲に没頭した中高時代

大学進学を機に作曲家としての道を志す

一まずはじめに、野呂先生はいつ頃から作曲家を目指されたのですか？

私は中高と吹奏楽部に所属していましたが、中学2年生のときに取り組んでいた課題曲と自由曲の楽譜で自分以外のパートが何をしているのかというのが気になって、先生に頼み込んで課題曲と自由曲のスコアをお借りして、家で音源と一緒に見てみたんです。そしたらまず調号の違う楽器がある、ドレミで読めない楽器があることに気が付いて、そこで自分以外のパートがこんなことになっているのかという、目で見てわかる楽譜の面白さに初めて気が付きました。そこから楽譜が読めるようになりたい、音が分かるようになりたいと思って色々やっているうちに、ふとあるとき自分でも最低限音を書けるということに気が付きました、その後2,3年はもう授業中も勉強そっちのけで100均の五線ノートを大量買いして、そこに思いつく限りを書き殴っていました。

そうしているうちに気が付いたら高校2年生になってしまっていて、そこで受験を考えるときに一般大に進学し吹奏楽を趣味でやるか、音大にトロンボーン専攻で進むか、音大で作曲家を目指すかの三択で悩んで、結果的に作曲の道に進むことを決めました。

大学入学後、吹奏楽の曲であったり様々な作曲技法を勉強する中で、より作曲家を目指したいという気持ちが強まりました。

一初めて作曲されたのも中学2年生の時ですか？

そうですね。確か金管八重奏の曲だったと思います。

当時定規も使わずフリーハンドでぐちゃぐちゃに書いて、今振り返ればオーケストレーションも訳のわからないようなものだったと思いますが、その後それを基に次の年の吹奏楽コンクールの課題曲に応募したんですよ。まんまと落ちてしまいましたが、そこが作曲家としての原点だったと思います。

クラシックの枠にとらわれない 色彩豊かなコード進行が作品のアクセントに

ー野呂先生の曲は第86回定期演奏会で演奏した『吹奏楽のための協奏曲第一番』など、美しい和声が印象的な曲が多いように感じます。野呂先生が作曲される中で何か意識されていることはございますか。

ある種自然な流れではありますが、クラシックや吹奏楽の曲は邦人/外国の方の作曲家を問わずクラシックに基づいた和声感で書かれることが多いです。一方私は趣味でミュージカルやポップス、DTMでの作品等をよく聞く人間でして、そちらで使われている音はクラシック和声で表現できないようなポピュラーコード、つまりコードで示した方が早いようなことが多いです。構成でいうと三和音、いわゆる”ドミソの和音”に留まらず、ドミソシレファ、7音,9音,11音,13音まで到達するような音の重ね方を組み合わせて、色彩豊かな作品になるように心掛けています。それが私の強みであり、個性でもあると思っています。

ー今回の委嘱作品である『祝福のアコレード』もFm7/B^bから始まりますね。

そうなんですよくご存じで。いわゆる分数コードと呼ばれるものですが、その時点で三和音ではなく7音,9音,11音という和音であったり、それ以外にも臨時記号を含めてマイナーセブンスフラットファイブですとか、そういったものをかなり多用した曲を書いています。『祝福のアコレード』にもそういった場面が多数散りばめられているかと思います。

ー今回かなり鍛えられました(笑)。

ですよね(笑)。耳が鍛えられる曲だと思います。

ー野呂先生が好きな、あるいは影響を受けた作曲家はどなたでしょうか。

吹奏楽で好きな作曲家は、日本の方ですと天野正道先生、真島俊夫先生、長生淳先生です。高校生のときに作曲家を志す前からずっと好きで、ひっきりなしに家のパソコンで聞いていた記憶があります。

外国の方ですとフィリップ・スパーク、ジェームズ・バーンズあたりをよく好んで聞いていました。今でも好きな作曲家の先生方ですね。クラシックで好きな作曲家ですと、フランスの1900年代を彩ったラヴェル、ドビュッシーの作品を聞いて、どうやったらこの和音を思いつくのだろうというところから音大受験に臨んだというのがありますし、イギリスの作曲家では戴冠行進曲『王冠』で有名なウィリアム・ウォルトンなど、煌びやかでロイヤルな音楽というのも私は好きでしたね。他にも挙げだすとキリはないですが、ポップスであったり、気になったものがあれば作曲家問わず聞き漁って、時折分析したりとかはありますね。

ー野呂先生はトロンボーンを現在もなお演奏されているとのことですが、ご自身が作曲した曲をご自身で演奏されることはあるのですか。

昔はそれこそたまにありましたが、大学生のときに師事していた先生に「自分の曲はなるべく自分で演奏しない方が良い」と言われまして、理由を聞いたところ「ピアノでもトロンボーンでも、自分で演奏できる範囲で作ってしまうから」なんですね。

演奏してくださる演奏者がどの技量かというのは、実際にお会いして音を出してみないと分からないですし、多少自分が難しすぎるな、もしかしたら演奏できないかもしれないと思う範疇を越えたものでも書けるようになるために、自分の曲を自分では演奏しないようにというお話を先生からいただきました。

それから殆ど自分が作曲したものは、指揮者として立つにはいい、けれど演奏者の中に自分が入らないように、指揮者としてまたは客席で前から聞くことを心掛けています。そうすることで客観的・俯瞰的な見方ができて、自分の曲がちゃんと頭で思った通りに鳴っているのか、バランスは大丈夫か、難しい所はないかという演奏者からのやりとりやフィードバックを含めて曲を作る人間として成長していく、というのも併せて言われましたので、自分の曲には極力乗らないように心掛けています。

『祝福のアコレード』の原点は トランペットとユーフォニアムの協奏曲

ー今回『祝福のアコレード』を作曲していただきましたが、今回の作品でこれまでの野呂さんの作品と異なる点や、何か特別に意識された点などはございますか？

このお話をいただいたのがちょうど1年前、2022年の年末でした。そこから約1年後、2024年1月の第90回定期演奏会で演奏されるとのことでしたので、ゆっくり構成を練りながら半年かけて2023年の夏頃楽譜をお渡ししました。

その期間ずっと考えていたのが、まず第1部第1曲目で頭の曲としてとのご依頼でしたので、それに相応しい華やかな曲になるように意識しました。そこに上乘せして、第86回定期演奏会を聞かせていただいて、その時点で大人数大編成での演奏が可能であること、そして一定以上の技量があるように感じましたので、曲を書く人間としても挑戦的な曲になるよう志しました。その結果、私の普段の曲の中でも過去一番音数の多い、細かい、忙しい、そして音域がきつという、メイン曲さながらの曲となってしまいましたが、そこから期待される演奏効果を早稲田吹奏楽団なら十二分に引き出してくれるだろうと信じて書かせていただきました。

ーアコレードの作曲にあたって影響を受けた作品があればお伺いしたいです。

作っている最中から追って意識しだしたのは、有名どころですとクロード・トーマス・スミスの『フェスティバル・ヴァリエーションズ』、『華麗なる舞曲』などがありますが、少しマイナーな曲で『フライト』という曲があります。7分ほどの演奏会用行進曲ですがその作品がとても好きで、祝福のアコレードに色彩的に影響したうちの一曲です。

またそれ以上に影響したのが、これはほとんど答えみたいになってしまうのですが、J.バーンズの少しマイナーな曲で、トランペットとユーフォニアムの二ソロとバンドのための協奏曲で『デュオ・コンチェルタンテ』という曲があります。

ーデュオ・コンチェルタンテ…？

はい、調べると幾つか出てきます。それを聞いていただくとああそういうことかとなると思いますので、気になりましたらぜひ探して聞いてみていただけるとと思います。

ー最後に、『祝福のアコレード』をご自身で演奏してみたいですか？

吹きたくないです(笑)！今でも楽団に入って週1で吹いているので腕は落ちていないはずですが、全盛期の高校生くらいのときよりは音も出なくなっていると思います。それも踏まえると今回トロンボーンは替えポジを駆使しても結構忙しいですし、音も高いので自分ではやりたくないなと思いながらトロンボーンパートに音を入れていた記憶があります(笑)。

演奏会当日、1曲目開始前に野呂先生とのプレトークを予定しております。そちらでは『祝福のアコレード』の内容がより伝わるかと思っておりますので、プレトークもお楽しみに！



2023年12月26日、野呂先生をお招きし『祝福のアコレード』をご指導いただきました。

作曲家としての視点から熱のこもったアドバイスをいただき、大変貴重な機会となりました。定期演奏会本番ではよりパワーアップした演奏をお届けできると思いますので、皆さまぜひ演奏会に足をお運びください！